広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	現行小学校国語教科書における「けんか」教材一覧
Author(s)	恩田，恵子
Citation	児童の言語生態研究 , 11 : 42 - 48
Issue Date	1982-12-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045124
Right	
Relation	

現行小学校国語教科書における「けんか」教材一覧

恩田恵子

現行の小学校の国語教科書の中には、喧嘩を取り扱った教材がどれ位あるのだろうか。五社の教科書会社の一年から六年までの教科書を当たってみた所、喧嘩そのものが主題となっている教材は殆どなく、僅かに「けんかした山」（教出一上）「かにむかし」（日書2上）「ひっこして来たみさ」（教出2上）の三つを挙げることができる。そこで兎に角、喧嘩の場面が出てくる教材をここでは、喧嘩教材として考えたいと思う。

さて、その様な教材を含めて、喧嘩教材がどれ位教科書の中にあるか、学年別に数えると次のようである。

一年・三、二年　五、三年　三、四年　二、五年　五、六年　四、計　二十二

教材で、非常に少ないといえる。

喧嘩が起こる時、そこには感情への刺激（きっかけ）があり、次に感情の昂揚、そして感情の安定という過程をたどると考えた。そこで、各教材に現われている喧嘩の様々な形を表にまとめ、その特徴を捉えようとした。表は主として、喧嘩をした当事者達、原因、事実、会話、を書いた。四角で囲んだ箇所は、喧嘩のおさまるきっかけとなった人と行為などである。又、それぞれがどの様な感情であるか、種類分けをしてあるのが太字で書いた部分である。

では、一年生の教材から六年生の教材までを学年ごとに、その特徴を述べて行くことにする。

一年生、三教材の中の二教材、即ち「けんかした山」「せかい一大きなケーキ」は、喧嘩に対する仲裁者の働きかけの仕方がよく似ている。その仲裁者は、喧嘩の当事者に対して強い立場にあり、喧嘩を実力を行使して収めているのである。これは、一年生の児童にとっての目上の人の存在が、どのようであるかを示しているようでおもしろい。この形は、他学年には類似した教材（「一つが二つ」二上）を除いては見られない。

残りの一教材「うれしい手紙」は、全く形が異なる教材である。まず、喧嘩の仲裁者がいなくて、当事者達の片方の告白によって、言い争っていた事の真偽が明らかにされる。喧嘩をしている片方が、初めから事実を知っているので、感情的には安定していて、優位な立場にあり、同じレベルでの喧嘩には至らない。言い換えれば、感情の衝突がないので、喧嘩教材に入らないような例外的教材である。

二年教材、四教材のうち「ひっこして来たみさ」「一つが二つ」の二教材の構成は、よく似ている。まず喧嘩があり、そこに、第三者の意図的又は、無意図的介入がある。そしてそれは、喧嘩の当事者達に羞恥の感情を起こしている。「二人は：てれくさそうにかおを見合わせました。（ひっこしてきたみさ）「ぼくが、ほんとうのトラゴロウさ」と、一びきだけのトラゴロウが、少しはずかしそうに答えた。（一つが二つ）

「名前を見てちょうだい」では、喧嘩に第三者による働きかけがない。弱者の立場にある者が、必死になって強者に向かって行き、自分の力で勝ち、喧嘩に終止符を打っている。この教材は、全教材の中でも非常に特異な存在である。

「きかん車やえもん」は、構成が少し複雑である。つまり、最初に起こった喧嘩の相手が代わり、喧嘩がどんどん異なった方向へ発展して行くのである。まず、プライドを傷つけられたやえもんが、怒って八つ当たりをする。被害を受けた人々は、やえもんを攻撃し、やえもんの身は危なくなる。その立場に追いやられたやえもんの気持ちは、一通りではない。そしてここでも第三者の介入（助け）があって、安定へと向かっている。

次に、**三年生**教材を見てみると、この学年になって初めて、喧嘩教材に「ずるい」という感情用語が入って来ている。「くま一びき分は、ねずみ百びき分か」「絵を見てお話を作る」（喧嘩の発端だけなので表は省略した）

二点目に、喧嘩をした主人公の心が、一、二年に比べより複雑になってきている。これは、二年教材「きかん車やえもん」でも少しふれた。「つり橋わたれ」のトッコは、相手に弱味を見せたくなくて、誰が遊んでやるものか、と虚勢を張るが、やはり一人では孤独を感じてしまう。「くま一びき分は、ねずみ百びき分か」のウーフにおいても、相手のツネタ達の行為に対して、ずるい、損をした、やり返そうといった思いが、頭の中に浮かんで来ている。このように、心の動き方が単純ではなくなってきているのが、この学年の特徴といえる。又、ここで、虚勢を張るという構え方が出て来ている。これは、他に四年、六年においても表われている。

四年生教材も二編と少ないが、二教材に共通して言えることは、今までの学年は、喧嘩をした片方（主人公）の

気持ちを中心にして書かれてあったのが、両者の立場から、その心の動きが描かれているということである。このことは、この学年の児童が、客観的な立場から、ものを見ることが出来るようになっていることを示していると考えられる。

では次に、それぞれの教材の特徴を見ることにする。「つばきの木から」では、第三者の介入がなく、しかも、喧嘩の収まるきっかけが同じ経験をすることであって、その事から心が通い合い、安定へと向かっている。

「沢田さんのほくろ」は、構成が少し今までの教材と異なっている。今までのパターンで行くと、第三者の介入後、すぐ安定へと向かっていたのが、ここではもう一度無意識ではあるが、攻撃があり、それに対して以前とは違った反応をしている。そしてそれは、自分の力で立ち直りつつある主人公の姿を、しっかりと浮き出している。

五年教材の「大きなしらかば」は、四年教材の「つばきの木から」と同じような形で喧嘩が始まるが、今までのように、充足感情（満足）や、対人感情（融和）で終わってはいない。これは、四年教材の「沢田さんのほくろ」でも少し触れた。ここでは、喧嘩が意外な方向へと発展している。つまり喧嘩から主人公が起こした行動は、喧嘩相手に対抗するためのものであったが、それは、その喧嘩相手もそうだが、第三者である母親を大いに驚かせ、その母親を悲しませる。その為、行為者はどうして良いかわからず、ただ慰めるのである。自分の起こした無鉄砲な行いは、喧嘩の相手を見返してやろうという気持ちからであったが、結果的には、そんな気持ちとは全くかけ離れた所へ感情を動かされてしまった。しかも主人公は、自分より年上の人間をいたわるという高い立場にいるのである。

「小さな出来事」も、新しい視点を含んでいる。友人との関わりで、主人公の心が様々に振れ動く。そして自分が負の方向に動こうとした時、第三者の何気ない言葉を聞く。その言葉は、自分の中で大きく広がり、自分自身の行動をも変化させる。つまり、自分の中のいろいろな感情を、自分自身が何かのきっかけによって、正の方向へ動かしている。

これと同じように「源じいさんの竹とんぼ」において、主人公は、自分の中に罪の意識を感じ、何かすっきりしないもやもやしたものがあったが、第三者（源じいさん）の言葉によって、自分自身を解放することが出来ている。言い換えると、自分の感情を満たそうとして行った行為が、実は自分自身、良くない行為であったと感じている所にきっかけを与えられ、解放へと向かうことができているのである。

「健にいのみかん」は、兄弟喧嘩である。兄弟（姉妹も含めて）喧嘩は、一年「世界一大きなケーキ」二年（絵を見てお話を作る）で取り上げられている。この二つの喧嘩が物の取り合い、所有権の争いであるのに対して「健にいのみかん」の喧嘩は、自分の触れてほしくない部分を突かれたことがきっかけになっている。兄は仕返しをするが、弟は難無く負けてしまう。兄は、「アホやな、これは、遊びなんやぞ」とムッとして座るが、ここでも仕返しが成功したにも拘らず、満たされてはいない気持ちが感じられる。

「おいの森と、ざるの森、ぬすと森」の喧嘩では、本当はどろぼうをした黒い男が、力によって、相手を威圧しようとしている。そこに真実を知っている者の登場で、その男はすごすご引き下がる。男の扱われ方が、二年の「名前を見てちょうだい」の大男によく似ている。

六年教材については、作品ごとに特徴を見ることにしたい。まず「たよる自分から、たよられる自分へ」では、初めて親子喧嘩が出てくる。自分ではうまく制御できなかった感情を、ある経験をすることで、素直に自ら変化させることができている。ここでは、第三者の介入がない事と、自分の経験が自分を変えているのが特徴といえる。

「少年イリューシャ」では、大きな二つの喧嘩がある。一つは親友同志の喧嘩、もう一つは、いじめっ子達とイリューシャの喧嘩である。ここに登場して来るイリューシャは、どこか屈折した所のある子供で、全教材の中で、少し特異な存在である。心では、そう思っていなくても、反対の態度を取ってしまったり、相手のやさしさに対して反発してみたり、心を開くまでに少し時間を要する。主人公としては、複雑な感情の持ち主として描かれている。

「救命艇の少年」は、最早、喧嘩とは言えない領域に入っているのかも知れない。言い争いの原因が、人の命に関わる事であり、お互いの意見は、思想、信条という段階に位置するものであるからである。正義とは何か、を問う、少し高い次元での喧嘩である。

最後に「かくれんぼう」についてみることにする。そこでは、兄、妹、そして近所の友達のよし子の間で喧嘩が展開する。ここでは、遊びの中で兄と妹が喧嘩を始めるが、そこによし子が仲裁に入る。五年の「健にいのみかん」と異なる点は、仲裁に入ったよし子は第三者としての立場にあるのではなくて、喧嘩が起こった時には、同じ立場にいた者であるということである。ところが、状況を見ていて自分をどの立場に置けば良いのかを判断し、喧嘩を落ち着かせようとしたのである。

以上、学年を追って、その教材の中に表われている喧嘩を見てきた。学年によって、それぞれの教材のパターンが似ている学年と、六年生の教材のように、内容、形共に、多岐に渡っていて、共通点のない学年とがある。しかし、一年教材から順を追って見ていくと、やはりそこに、人間の感情が複雑に分化して、成長しているのを感じることができる。六年生の教材に共通点を見い出せなかったのも、この複雑さの故であるのかも知れない。

（神奈川・相模野小・教諭）

二年	名前を見てちょうだい 東書2上	えっちゃん　VS　大男 所有権の争い　（誰の帽子か） 帽子を食べて 「もっと何か食べたいなあ」 ↙ 「私は帰らないわ 食べるなら，食べなさい」 〔情動　発動（必死）〕 ↘ 大男ぶるぶるふるえて消える ↙ 「ああよかった」 〔充足感情，満足〕	一年	けんかした山 教出1上	VS 山　背較べ　山 〔比較感情，優劣〕 ↓ 第三者（お日様，お月様）による禁止 「やめろ」「おやめなさい」 ↓ お互いに，言うことをきかない 〔行動感情，反発〕 ↓ 第三者（お日様）による実力行使 ↓ しょんぼり顔を見合わせました 〔情動，反戻（後悔）〕 ↓ 落ちつく
	一つが二つ 日書学図2上	トラゴロウ　VS　トラゴロウ 真偽の争い　（どちらが本物か？） ↓ 第三者（きつね）の意図的介入 ↓ もとにもどる ↓ 少しはずかしそうに答えた 〔情動，羞恥感情〕 ↓ 「やっぱりぼくは，1びきだけの方がいいなあ」 〔充足感情，満足（納得）〕		せかい一大きなケーキ 日書1下	（高2〜赤ちゃん） 1ダースの兄弟姉妹の間でケーキの取り合い 〔　　〕 ↓ 第三者（母親）の実力行使 「ケーキは買いません」 ↙　↘ 「ちぇ，つまんない」　「今度はけんかしないから」 〔行動感情放棄〕　〔情動反戻（くやむ）〕 ↓ 二人はしょんぼりしていました 〔　　〕 ↓ すてきなことを，思いつきました ↓ 好　転
	ひっこして来たみさ 教出2上	みさ　VS　しんやくん （みさがプライドを傷つけられた。どろぼう呼ばわりされたことに腹を立てた） 〔　　〕 ↓ 第三者（犬）の無意図的(?)　介入 ↓ てれくさそうに顔を見合わせました。 〔情動　羞恥感情〕 ↓ お互いにゆずり合う気持ちが生まれる 〔対人感情　融和〕		うれしい手紙 教出1下	がまくん　VS　かえるくん （友達同志） 相反する意見のぶつかり合い （来る，来ない） 反復 ↓ かえる君の告白 「きっと来るよ，だって僕が君に手紙出したんだもの」 ↓ 「君が？」 ↓ とても幸せな気持ちでそこにすわっていました。 〔充足感情　満足〕

四年	つばきの木から 光村4上	原因らしからぬ原因　話の成り行きで カズヤ　VS　タモツ 「平気だって言ったじゃないか」　「カズちゃんには出来っこない」 〔　　〕　〔比較感情　優劣（みくびる）〕 ↓ 同じ経験をする ↓ 心が通い合う 〔対人感情　融和〕	二年	きかん車やえもん 学図2下	やえもん　VS　電気きかん車 （プライドを傷つけられた「びんぼう汽車」） ↓ おこって八つ当たりをする 村人たちの攻撃「たたきのめせ」 • 悪かった • しょんぼりと〔情動　反劣（後悔）〕 • くずてつはいやだ 博物館の人の助け うれしそうな顔 〔充足感情　満足（気が晴れる）〕
五年	沢田さんのほくろ 教出4上	沢田さん　VS　光男，ヒロシ おせっかい　からかう 〔比較感情　優劣〕 自分のカラにとじこもる　疎外 〔対人感情（孤独）〕 ↓ 第三者（先生）による働きかけ ↓ 立ちなおる（不完全）　反省 構え　体裁　うっかり言う 以前とは違う対応 構え｛虚勢　体裁｝ 〔情動　反戻（後悔）〕	三年	くま一びき分はねずみ百びき分か 日書3上	①　ウーフ　VS　ツネタの家族 なわばり争い　「川は僕のなわばりさ　ウーフは帰れよ」 • ずるいの〔計量　狡猾〕 • そんしちゃうよ〔損得〕 • 今度からもうけようかな〔仕返し？〕 ②　ウーフ　VS　動物達 「ぼくらの百びき分」とどなりました 「そんならいらないや」 〔行動感情　放棄〕 ↓ 第三者　ウーフの父親の働きかけ（話） ↓ 〔充足感情　満足（納得）〕
	大きなしらかば 東書5上	アリョーシャ　VS　ボロージャ ふくれっつらをして引っこむ　「登れないだろうな…ヘーンあまえっ子！」 意図的 • はらだたしい　〔比較感情　優劣〕 〔行動感情　反発〕　いびる （登ってやるぞ）→　おびえる 「こわくなんかないや」「気が変になったんだ」 〔構え　虚勢〕 ↓ 第三者（母親）からの援助，指示 ↓ 木からおりる 第三者（母親）泣き出す ↓ どうしてよいか思いまどう〔情動停滞〕 なぐさめる		つり橋渡れ 光村3	トッコ　VS　山の子供達 弱味を見せたくないだが　こわい　「くやしかったらつり橋わたってかけてこい」 「だれがあんたたちなんかと遊んでやるもんか」 〔構え　虚勢〕 ↓ 1人では何をやってもおもしろくありません「ママ，今，何してるかな」 〔対人感情　疎外〕 ↓ 非現実的な出来事，トッコはつり橋を渡れた ↓ 山のくらしが楽しくなる or｛対人感情　融和　充足感情　満足

五年	源じいさんの竹とんぼ 学図5下	村の子達　VS　町の子 源じいさんを取られそうになったので町の子に文句を言う〔**比較感情　優劣**〕 ↓ 効果　大 しかし胸がいたむ [源じいさんの言葉] ↓ 頭をたたかれたようにうなだれた　〔**情動　反戻**〕 ↓ 「めそめそするのはやめろ」 ↓ 罪を許されたような気持ち **充足感情　満足**	五年	おいの森とざるの森ぬすと森 日書5上	黒い男　VS　村人達 どろぼう呼ばわりされた 「たたきつぶしてやる」 ↓ **構えごまかし** 「ちくしょう」 ↓ 村人達 どなる さけぶ ↓ 顔を見合わせて逃げ出そうとした **比較感情　すごすご** ↓ [第三者からの真実の告白] ↓ 逃げ出す ↓ 両者　和解する
六年	たよる自分からたよられる自分へ 東書6上	明子（長女）　VS　母 （手伝いや仕事を言いつける） • 仕方がない 〔**行動感情　放棄**〕 • なぜ私ばかりが？ 〔**行動感情　反発**〕 ↓ [明子が風邪をひき寝込んでしまう] • たいへんなのだなあ 〔　　〕 • 今までの自分を乗りこえて行かなければならない 〔　　〕		小さな出来事 日書5下	大村君　VS　友人たち （係の仕事をする，しない） 迷い　＋　－ ↓ 逃げよう　「逃げる気か？」 ↓ 友達につかまりしぶしぶ〔**情動　照合**〕 ↓ 腹が立つ ↓ 人に押しつけて〔**行動感情　放棄**〕帰ろうとする [第三者の何気ない言葉] ↓ 自己反省 仕事をしてすがすがしい気持ち〔**充足感情　満足**〕 • 二人逃げ出す • 一人帰る
	救命艇の少年 学図6上	三四郎　VS　今井兵曹 （コック見習い16才） 「そんなことできるものか」 「おれは正しいことを言っているんだ」 **情動　発動** ↓ 共鳴の声 救命艇内の南方人を海に投げこめという命令を下す 「きさまら俺にたてつく気か」 〔**古式感情　怒**〕 ↓ [少尉が三四郎の意見に従うと決断] ↓ 三四郎の顔に涙 ぼうぜんとし，みんなにつきとばされてもぐった		健にいのみかん 学図5下	良平（兄）　VS　啓ぼう（弟） 遊びの中で弟に弱点をつかれて敵討ちをする **比較感情　優劣** 泣き出す 「アホやなこれは遊びなんやぞ」 ムッとして座る ↓ [第三者（母親）の介入] ↓ なごむ

感情用語表　児童の言語生態研究会作成

1. 行動感情	ア，甘　え	すねる，ひがむ，ひねくれる，ねだる，せびる，せがむ
	イ，迎　合	おせじ，おべっか，おべんちゃら，こびへつらう，こびる，おもねる
	ウ，反　発	すくなくとも，せめて，わざと，故意に，ことさら，わざわざ，あえて，あくまで，なおさら，おまけに，〔断呼頭として〕〔怯めず，憶せず〕
	エ，放　棄	あきらめる，おこたる，さぼる，なまける，ずるける
2. 比較感情	ア，優　劣	劣情　上↘下(一)いびる，いじめる，さいなむ，虐待する 上↘下(＋)顔まけ 上↖下(一)ねたみ，そねみ，しっと，やきもち 上↖下(＋)うらやみ，羨望 情　上↘下(一)つけ上がる，増長する（上がる），あなどる，みくびる，さげすむ，軽蔑する 上下関係けなす，くさす，こきおろす
	イ，圧　倒	気おくれ，みじめ
	ウ，敗　北	しょげる，ふさぐ，めいる，すごすご
3. 時間感情	ア，逼　迫	決断，断念する，思いきる，決心，決意，さし迫る，切迫する，せっぱつまる，にっちもさっちも，抜きさしならない，のっぴきならない，すんでに
	イ，流　暢	とっくり
	ウ，経　過	つらつら，ほとほと，つくづく
	エ，一　括	とりあえず，さしあたり，ひとまず，つい，まず，さしずめ，とどのつまり
	オ，予　期	もはや，あらかじめ，まえもって，かねて，かねがね，もう，はや，すでに
	カ，	チャンス的なもの
4. 空間感情	ア，あてはめ（平面）	ぴったり，ちょうど，まるで，さながら，あたかも，にあう，につかわしい，ふさわしい，うってつけ，まったく，すっかり，もっとも，無理もない，（すこぶる），まるで，いかにも
	イ，隔　離（距離）	とても，とうてい，よほど，かなり，なかなか，とんとん，（せいぜい，たかだか，そこそこ）―計量と近いのでは，まるっきり，さっぱり，さらさら，ゆめゆめ，おさおさ，てんで，どうしても，ろくに
	ウ，添　加（分散）	どんな，どういう，いかなる，なにやかや，あれこれ，なにくれ，かれこれ，どっちつかず

六年

少年イリューシャ　日書6上

イリューシャ（いじめられっ子）　VS　コーリャ（二級上力強くりこう）

犬に悪いいたずらをした → 「君とは絶交だ」

「ああいいさ…君なんか大きらいだよ」

〔構え　虚勢〕

イリューシャが同級生達にいじめられる

コーリャにナイフをぬいてとびかかる。同情されるのはいやだ ← 中へ割って入る

〔行動感情　甘え（すねる）〕

泣きながら去る

イリューシャ　病気になる

うれしそうに涙ぐみ ← 1カ月後見舞いに来る（犬をつれて）

はずかしそうに壁の方をむく

〔古式感情喜〕↓〔情動羞恥〕

「あの白犬だ」うれしそうにさけぶと晴ればれとほほえんだ〔充足感情　満足〕

少年イリューシャ　日書6上

イリューシャ　VS　いじめっ子達（6人）

自分を笑われたと思い石を捨げる → 石合戦を始める

↓

青年牧師が仲裁に入る

↘説得

↙説得

意地の悪そうな顔をして大きな石を投げつけた

↓　↙にこにこ笑って尚も説得

泣きだして走り去る

かくれんぼう　光村6下

よし子　ジョール（兄）　オデット（妹）

おにはオデットだ　「ジョールはうそいやだわ」

「そんならいいわ。私おにになるわ」

「オデットずるい」

「いいことよ私が鬼になるから」

「オデットおいで」不興気に言う

不平らしい顔をしながらも兄の後を追ってかけ出す

12,古式感情	ア，喜怒哀楽	むじゃき，おそれ，わがまま，かって，純真，純情，気まま，気まぐれ
	イ，怪異感情	不思議，怪奇，奇怪
	ウ，信　仰	
13,微細感情	ア，とりたて感情	ひとしお，ひときわ，いちだんと
	イ，無記感情	〈ox 詩，なんにもないところに，感情が浮ぶ〉
	ウ，気　配	春めく
14,欠落感情	落胆，埋没陥落	気抜け，気落ち，力落し，落胆，ひょうしぬけ
15,その他	哀訴感情	どうか，どうぞ，なにとぞ，感情が母体となる行為　ex　袖にすがる … 理屈ではない
5,対人感情（対人関係感情）	ア，違和融和（他からの影響が大きい）	
	イ，疎　外（自らの影響大なり）	ひとりぼっち，孤独
	ウ，忖　度（えんたく）	気がね，あれこれ考える，むげに
	エ，接　触	気にさわる，迷惑
	オ，作　為	だます，ごまかす，あざむく，あわよくば
6,構え	ア，よそおい（演技が入る）	• ほら，そらごと，気どり • ぶっきらぼう，なれなれしい，よそよそしい，そっけない，すげない
	イ，ごまかし	うそ，いつわり，虚偽，虚言
	ウ，虚　勢	のるかそるか
	エ，体　裁	（つくろう）　世間体， はじ→見られる … きまりわるい ↘立ち直り … 復活
	オ，自　信	沽券　（ていさいか？）

7,秘密感情	ア，暴　露	ばらす，鼻をあかす，あばく，すっぱぬく
	イ，隠　蔽	かくす
8,充足感情	ア，満　足（＋）	気がはれる，なっとく，とくしん，合点
	イ，焦（－）	気になる，気ぜわしい
	ウ，懐　疑（＋－）	首をかしげる
9,計量（度をはかりうるもの）	ア，緊張弛緩	気がはる
	イ，難易複雑	気むずかしい
	ウ，強弱軽重質量	気がつよい，気楽，気が大きい，気が多い，（あながち）
	エ，狡　猾（知的度合の計量）	ずるい，こすい，狡猾
10,情動	ア，興味関心	気のり
	イ，発動，衝動	• 執念，執心，執着，ひとえに，一生懸命，いちずに，ひたすら，しつよう，夢中，必死，けんめい，むこうみず，無鉄砲，無媒 • 無意識に，ぼんやりして，うっかり，つい，おもわず
	ウ，反戻停滞回帰	• 後悔，くやむ，くいる，せっかく，いまさら • ちゅうちょする，ためらう，逡巡する，迷う，当惑，困惑，たまらない，やるせない，切ない • または，あるいは，もしくは
	エ，照　合	はんざつ，ややこしい，面倒，面倒くさい，やっかい，むずかしい，わずらわしい，おっくう，しぶしぶ，いやいや，不承不承，心ならず，不本意，おちおち，おいそれと，仕方なしに，やむなく，よんどころなく
	オ，羞恥感情（内面のみ）	恥かしい，たえる，こらえる，しのぶ，がまん，てれる，はにかむ，きまりわるい，てれくさい
11,評価	ア，評　価（基準）	気品
	イ，好　悪	気にいる
	ウ，	こっけい，けっさく
	エ，	だらしがない，ふがいない，なさけない